
優しき闇の使い魔

孝&誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しき闇の使い魔

【Nコード】

N3657I

【作者名】

孝&誠

【あらすじ】

この物語は…

不運な転生者と…

優しき闇の使い魔との…

壮大で…

壯絶なる物語…の、筈

プロローグ 少年編（前書き）

初です

このサイトに初投稿します

友人と創作途中の物です

更新は兎に角不定期です。

ご了承ください。

プロローグ 少年編

とある一室。

地下にあるこの部屋には窓がない。

小さな照明しか点けていない現在、この部屋はぼんやりと薄暗い雰
囲気を纏っていた。

部屋には様々な物が置かれている。

ボルトやナット、作りかけの電子基盤、数多の配線の切れ端、文庫
本に小説、どこかのお土産らしきキーホルダーや御守り、巨大すぎ
るコンピューター。

統一感はなく、それでも汚らしくない程度には整理されていた。

その部屋の隅に置かれたベッド。

そのベッドの上に人影が一つ。

黒い絹のような長髪を纏めず、ベッドに広げているそれは少年。

年は16・7歳くらいだろうか。

目を閉じたようにして仰向けに寝転がるその少年はまだ幼さの残る。

彼の顔は格好良いと言うより、可愛い部類に入るだろう。

美少年ではなく、美少女の可愛さではあるが。

「……………はあ……………」

ため息一つ。

物憂げなその表情はゾクゾクするほどに扇情的である。

「…どっしょ…」

深い悩みを感じさせるその表情。
だが実際は…

「暇…」

なだけである。

「…ん」

手を伸ばして頭上に。

雑多な物の中に手をつ突っ込み、目的の物を探す。

発見。

それは黒いネコ耳のついたカチューシャ。

それを頭に着ける。

「…にゃあ…」

鳴いてみる。

「……………はあ」

外す。

どうやら飽きたらしい。

彼は本当にこれで暇が潰せると思ったのだろうか…。

優しき闇の使い魔 プロローグ少年編

この暇そつで挙動不審な少年はヴィストリア。

何を隠そつ魔王^{まおう}である。

しかも最高位に限りなく近い魔王である。

ベッドにうつ伏せになり、目を細めてタレさせ、猫の鳴き声を吐き、
凄まじくだらけきつた彼だが、魔王でなのである。

全世界の悪魔信者に謝罪をさせなくなるほど、その彼の様子は癒されるものであった。

この光景を見れば悪魔信者の大半が脱退するだろう。

『いくらなんでもだらけすぎだよヴィステイ』

突然聞こえた女性の声に驚く様子のないヴィストリア。

声の出元である腕に目を向ける。

手首に填められた銀色に光る金属製の環。

銀色の輪に緑色の宝石がついている。

銀色の腕輪部分には精巧な彫刻が施しており、半端な芸術品などとは比べものにならないくらい美しい。

これは、とある魔法で魔砲な少女が出てくるアニメを参考にして作った“人工知能搭載型可変式魔術補助機構兵器”…通称デバイス。

名前はツヴァイ。

ドイツ語で2を表す。

そんな彼女をツンツンとつつきながらヴィストリアはゴロリと寝返りをうつ。

「そんなこと言ってもさあ〜。こつも暇だとなにをして良いのか判らないんだってば〜」

くあああ〜。と欠伸を一つ。

『寝れば?』

ツヴァイのアドバイス。

「二ヶ月くらい寝た」

寝すぎである。

『読書とか?』

「読みたいのはだいたい読んじやったし…」

『二次小説とかは?』

「みんな似たようなのばかりだからねえ…」

『もう、文句ばっか…』

「うーん…いつそ自分で作る?」

『…はい?』

「よし、じゃあやってみよう。まずは設定だね…」

『まあやるっていつなら文句はいわないけど…』

「題材はありがちだけど“ゼロの使い魔”で

『うんうん』

「で、斬新さを目指すために…」

『目指すために?』

「主要メンバーを出さない」

『ええ!?!?』

「そして主人公はモートソグニル」

『それって学院長の使い魔だよねえ!?!?あのネズミだよねえ!?!?』

「そしてそのモートソグニル、作品開始から3行で死ぬ」

『いきなり!?!?』

「さらにモートソグニル、異世界に転生」

『もはや“ゼロの使い魔”関係ないよねえっ!』

「さらに異世界編1行でモートソグニルまた死ぬ」

『さらにあつという間に死んじゃってるよ!?!?』

「そして“ゼロの使い魔”の世界にまた転生」

『なんのために異世界行つたの!?!?』

「そして残念なことにこの世界でもまた死ぬ」

『モートソグニルどれだけ貧弱なの!?!?なんで貧弱なのにすぐ死ぬような危険なことするの!?!?可哀想すぎるよ!?!?』

「死ぬ原因は女性のスカートを覗こうとして失敗したから」

『一気に同情心が無くなったよっ!?!?』

「そしてここまでがモートソグニルが主人公の話」

『モートソグニル死んでる話しかなかったよねえ!?!?』

「そしてここからようやくルイズの登場」

『主要メンバー出さないんじゃないの!?!?』

「ん…なんか出しても良いような気がしてきたから」

『スツゴく適当ねえ!?!?』

「で、ルイズが使い魔召喚」

『なんかあっさり流された!』

「そこでフリーダムガンダムを召喚する」

『最強じゃないっ!』

「だけど操縦方法がわからなくて使えない」

『いきなりリアルね!』

「そしてフリーダムガンダムを取られたキラ・ヤマトが怒ってストライクフリーダムに乗ってハルケギニアを襲撃する」

『なんか世界滅亡の危機なんですけど!?!』

「そしてキラは料理長のマルトーさんと色々あってトリステインの王になる」

『マルトーさんにしたの!?!』

「そして更にマルトーさんと色々あってキラは世界を統一する」

『だからマルトーさんにしたの!?!』

「さらにさらにマルトーさんが頑張って、ガリアのジョセフ王が女になって…」

『頑張ると性別まで変わるの!?!』

「最後にキラがマルトーさんを正妻に迎えてハッピーエンド」

『マルトーさん男だよねえ！？それにルイズがいつの間にかいなくなってるし！』

「ああ。ルイズは途中で死ぬから」

『そんな重要なファクター抜かさないでよ！』

「まあこれもマルトーさんが関わってるんだけどね」

『だからマルトーさん何者なの！？』

「実はマルトーさんは始祖ブリミルの生まれ変わり…」

『そつなの！？』

「…が生まれた病院で薬を貰ったことのある患者」

『すっごい他人じゃない！』

「…よく考えたらこれ物語にするの無理じゃない？」

『よく考えなくても普通に無理ですけどねえっ！』

「ふむ…」

そしてふと思っ。

「しりとりしよっか」

『唐突すぎるよっ！せめて脈絡とかが欲しいよ！』

「脈絡って…暇だと言えばしりとり、でしょ？世界の常識だよ？7×7の答えは41だって言うくらい常識でしょ？」

『7×7は49だよっ！』

「あれ？7×6が41だったっけ？」

『それは42！っていつか41になるような掛け算はないよっ！』

「甘いよツヴアイ！なんと82×1/2は41なんだよ！」

『なんの話！？なんで掛け算の計算式について私たちこんなに熱く語ってるの！？』

「それはもうオーストラリアのカンガルーたちの食糧問題のために」

『41にする掛け算がどう食糧問題に繋がるのかまったく判らないよっ！』

「判る人には判るんだって」

『判る人に会ってみたいよ！』

「ちなみに僕も判らない派だから」

『グイステイー！！！』

「さて。41に関して納得してもらったところでしりとりしようか」

『何一つ納得してないけどねっ!?!?』

「じゃあツヴァイからね」

『ああマイペース!』

「じゃあカンガルーの“ー”からね」

『私にどうしろと!?!?』

「乗るなら早くしろ、でなければ帰れ」

『紫の人型汎用兵器ネタを言われても私にはどうしようもないよっ
!』

「はあ…判ったよ。なら“を”からでいいよ」

『なんで“妥協しました”って雰囲気なの!?!?“を”から始まる言
葉なんて私、知らないよっ!』

「はあ…全然駄目だねツヴァイって…!」

『ああ!なんか呆れられてる!?!?スツゴク理不尽だよ!そんなに言
うならヴィステイからやってよ!お題は“を”で!』

「をことてん」

『をこ…え?なにそれ?』

「をことてん。漢字で書くと“乎古止点”意味は、漢文訓読のために、漢字の四隅・上下などにつけて、漢字の読み方を示した点や線などの符号のことだよ」

『知らないよそんなのっ!』

「だからツヴァイは駄目駄目なんだよ」

『なんか凄い悔しいっ!っっていうか自信満々に言ってるけど“をことてん”って最後“ん”だよ!』

「だね。次ツヴァイは“ん”からだよ?」

『終わってるから!“ん”が出た時点でしりとり終わりだから!』

「はあ…そんなだからツヴァイは駄バイスって言われるんだよ」

『そんなこと言われたの初めてですけどねえ!』

「いいかいツヴァイ…いや。ここはあえて本名である駄バイスと呼ぼう」

『ツヴァイって名前の方が渾名っぽく言うの止めてよ!』

「いいから聞くんた。僕は過去に言ったはずだ」

『な、なにを…!』

「駄バイス、と」

『数秒前の過去ですねえ！そしてなにを伝えたいのかまったく判らないし！』

「ああもういいよ。じゃあ今回は僕が負けっただけにしておくれよ」

『だからなんで“妥協しました”って秀困気なの！？私、凄くいたたまれないよっ！』

「じゃあ次はツヴァイからね」

『判りましたよもう…えっと、なら理科』

「ふむ…。 “猟奇殺人”の“り”からね。ひょっとしてツヴァイって血に餓えてる？」

『普通に“しりとり”の“り”だよ！私、どれだけ危険な存在だと思われてるの！？』

「とりあえず核弾頭並には…」

『メチャクチャ危険じゃない！』

「……ま、まさか自覚ないとも言つつもり？」

『なんでそんなに驚くの！？私の存在ってそんなに危険！？』

「そんなに必死に否定して…。初めての読者に人畜無害さを主張したいのは判るけど、嘘は良くないと思う」

『メタな発言止めてよっ!?!』

「いくら取り繕ったってどうせすぐにボロが出るのに」

『どうしても私を危険な存在にしたいの!?!』

「そりゃツヴァイ、今まで幾つの惑星を潰したと思ってるの?」

『してないよ!』

「……………」

『え?なに?ジト目止めてよ!してないってば!』

「……………」

『し、してない!嘘じゃないよっ!』

「まあそれは今話すことじゃないし」

『流さないで!私、危険じゃないもんっ!』

「えっと…“か”だよね。なら、解体」

『せめて訂正してから続けてえっ!』

「ああはいはい。ツヴァイは危険な存在じゃないですね」

『なんかスッゴク投げやりなんですけど!?!?』

「いいから続けるよ。次は“い”で」

『うう…。私、危険じゃないのにい…。い…。えと、椅子』

「スクラップ」

『ぶ…。プリントクラブ』

「ぶっ壊す」

『え、えと…。す、数字』

「自爆」

『ヴィステイひよつとして私のこと嫌い！？っていうか今までの発言からして絶対私のこと嫌いだよねえっ！』

「唐突にどうしたの？」

『さつきから凄く物騒なこと言われてるんだけど！』

「例えば？」

『さつきのしりとり全部！なんで心当たりないって感じなの！？』

「いや…。そんなこと言われても…」

『“解体”とか“スクラップ”とか“ぶっ壊す”とか“自爆”とか』

「いや、ふと頭に出てきて…」

『こんな単語がふと出てくるヴィステイの方が私なんかよりよっぽど危険なように思うんだけど!?!?』

「いや。あの単語はツヴァイを見てたから出てきた単語で…」

『私なにげに解体の危機!?!?』

「大丈夫。ちよつと落ち着きなよ」

『今までの会話のどこに落ち着ける要素があるの!?!?』

「少なくとも僕はツヴァイを解体する気なんか全くないから」

『どの口が言いますか! 私のこと危険だとか言ったり! 私にとつてのデスワードをポンポン出したり! 私なにかヴィステイに嫌われることした!?!?なんで私こんなにヴィステイに嫌われて…』

…チュツ

喚くツヴァイの宝石部分にそつと口付ける。

優しく唇を触れさせ軽く吸い、最後に舌で軽く舐めて唇を離す。

『……………え』

ツヴァイの喚きが止まった。

「にはは」

…チュツ

再び。

『な、ななななななっ!?!?』

「…ん」

…チュツ

三度。

『なななな、なにやってるのヴィステイ!?!?』

「キス」

『キスってそんなアツサリ!?!?』

「好きな相手にはキスをしたくなるって本に書いてあったから」

『ああもう! たまに私、ヴィステイが判らなくなるよ!』

「ふむ…なら旅に出よう」

『だから唐突だっば! 脈絡ってものを知らないの!?!? ってなんで
もう用意してるの?』

「善は急げってね」

『もつやだ…』

「持って行く物は…と…」

『お財布と…ああ…やっぱりその本も持って行くんだ…』

「当然。この本は僕の集大成だからね」

『ヴィストリア全巻…全巻って割に一巻しか無いのよね…』

「あとは武器だけど…ツヴァイがいるから大丈夫だよな？」

『一応アインも連れて行ったら？』

「ん。了解。んじゃ出発…ってあれ？」

いきなり右足が沈んだ。

目を向けると地面に銀色の鏡。

そこに右足がめり込んでいた。

「えっと…」

『召喚門…みたい』

「あれ？」

きょとんとした声を残し、ヴィストリアは鏡に吸い込まれた。

プロローグ 少年編（後書き）

はい、ギャグ満載でお送りしていく予定です。

感想、お待ちしております。

プロローグ 少女編（前書き）

続きいきます

プロローグ 少女編

朝の日差し。

澄んだ空気を超え、窓を超え、閉じられた瞼に届く。

「…うう…」

届けられた日差しから逃れるようにベッドの主は寝返りをうつた。

眠るのは少女。

幼さの残る顔。

柔らかそうなピンク色の髪。

日差しが邪魔なのか、寝苦しそうに眉を顰めているが、それでも彼女の愛らしさが損なわれることはない。

「…う…眩し…」

いい加減鬱陶しくなったのか、少女が身を起こす。

…が、

「あ、駄目…」

すぐに力尽きたように上体を前に倒す。
ばふっと頭から布団に突っ込む。

「うにい〜…」

そして気持ちよさげに鳴いて、脱力する。
このいかにも庶民的な彼女。

名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

何を隠そう貴族である。

しかも実家の階級は公爵。

ここ、トリステインにおいて爵位の最高格を授かっている実家。
その割には彼女に高貴さは感じられない。

コンコン

ノックの音。

「くう…」

だが、部屋の主はただいま快眠中。

やがて来訪者はドアノブを回し、部屋に入ってくる。

「はあ… やっぱり」

ため息を吐きつつ苦笑するのは赤い髪的女性。

名前はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

彼女は隣国ゲルマニアの貴族である。

長身に褐色の肌、主張しすぎる胸と燃えるような赤い長髪。いろいろな意味で目立つ。

そんな彼女は部屋の主であるルイズの肩を優しくゆさゆさと揺する。

「ルイズ…ルイズ。いい加減起きなさいってば！」

「うう…？キュルケさん？」

努力が実り、ルイズは上体を起こす。

「相変わらず朝は弱いよね」

クスクスと笑うその顔にはバカにした雰囲気はなく、ただただ微笑ましさがある。

「髪、跳ねてるわよ？」

そう言うところからともなくブラシを取り出し、ルイズの髪を梳き始める。

キュルケにとってこれは既に日常だ。

ふらふらと揺れる頭に苦勞することなく、慣れた手つきで髪を梳いていく。

「まったく。少しは一人で起きる努力をしたら？」

うりうりと頭を撫でてみる。
それに合わせて揺れるルイズの頭が楽しい。

「うっ…今日の眠気は凄まじく強烈だったのよ…」

「毎朝同じこと聞いている気がするわよ?」

「今日の睡魔は特別な。いつもはスライム一体なのに、今日はスライム二体を相手にしてるような強力さだったの」

どちらにせよザコである。

「ふふ…はい終わり。にしても今日くらい早く起きても良かったのに。それとも昨日の夜、眠れなかったのかしら?」

意味ありげな言葉にルイズはキョトンとする。

そんなルイズの反応にキュルケもキョトンとする。

「使い魔召喚のことよ?」

「……………あ」

思い出したように声をあげたルイズを見てキュルケは吹き出した。

「ぷっ…あはははははは！昨日あんなに使い魔召喚を楽しみにしてたのに！」

「やっぱり今日の睡魔は特別だったのよ…」

ルイズは赤くなっただ顔を冷やすために洗面用の水を顔にかけた。

優しき闇の使い魔 プロローグ 少女編

こんにちは。
ルイズです。

朝が極度に弱いルイズです。

前世も朝は弱かったんですけどルイズになってからさらに輪をかけて弱くなりました。

判る人は判ると思います。

私、前世の記憶があります。

所謂転生物というものです。

前世の名前はおおたに大谷 亜紀《あき》です。

渾名は“お”お“た”にあ“き”でオタクキーです。

いくらなんでもあんまりだと思えます。

確かにアニメやマンガは好きですけどオタクじゃないです。ちよつと人より好きなだけです。

それは中学二年生の時でした。

男子生徒にオタクキーと呼ばれました。

キレました。

男子生徒を追いかけてました。

階段から落ちました。

……死にました。

ええ。

今でも思います。

アホでしょう私。

気付いたらルイズになっていました。

ゼロの使い魔を読んでいた私はびっくりです。

びっくりと言えばキュルケさんです。

私、ゼロの使い魔の“キュルケ”は嫌いでした。

サイトの次に嫌いでした。

嫌いなキャラ、ワースト2でした。

もちろんワースト1はサイトです。

浮気性だしエロいし。

“ルイズ”がアレのどこに魅力を感じたのか未だ判りません。

……っと、話がそれましたね。

私が“キュルケ”を嫌いな理由。

それはあの挑発的な態度と見下した言葉遣いです。
なのにここのキュルケさんは違いました。

優しいです。

今ではもうお姉さんのような存在です。

私、亜紀のときは一人っ子だったので姉ができたようで嬉しいです。ちいねえさまも好きですけど、キュルケさんも好きです。

「…ズ…イズ…ルイズ！」

「…キュルケさん？」

突然呼ばれてびっくりしました。

「というかここは？」

外？

いつの間にも移動したのでしょうか？

「ミス・ヴァリエール？君の番だよ」

「…なにがです？」

唐突に言われても困ります。

一体このコルベール先生は何を言いたいのでしょうか？

「だから召喚よ。アナタの番よルイズ？」

ああ。

召喚ですか。

………はい？

「あれ？いつの間に？」

「はあ…アナタ考え事すると本当に周りが見えなくなるわね」

えへへ。

よく言われます。

「褒めてないからその得意げな顔は止めなさい」

コツンと額を小突かれました。

「ミス・ヴァリエール…」

「わ、わっ！い、今いきます！」

コルベール先生の額に怒りマークが出た気がしたので慌てて前へ。
私、炎蛇を怒らせるほどお馬鹿ではないはずです。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール…」

そこで詠唱が止まりました。

というか止めました。

マズいです。

緊急事態です。

このままじゃあのエロ犬が出てきます。

あんなのに私、ファーストキスを捧げたくないです。

「…ルイズ？」

ふと視線を逸らすとキュルケさんが心配そうにこちらを見てました。

そこで気付きます。

これはあの“ゼロの使い魔”とは違う、と。

キュルケさんは優しいです。

私はツンデレじゃないです。

これだけでもう別物です。

ひよっとしたらあのエロ犬もエロくないかもしれません。

確率は低いですけど！

ひよっとしたらあのエロ犬がまともかもしれないません。

確率は低いですけど！

でも私はそれに賭けます！

某ビア樽作戦部長は言いました！

“ 奇跡は起こしてこそ奇跡 ”

だと！

某病弱妹キャラは言いました！

“奇跡は起こらないから奇跡って言うんですよ”

と！ってこっちは駄目です！？

と、とにかく当たって碎けます！

「ルイズ！いきまーす！」

某白い機体に乗る人っぽく気合いを注入。

ニュータイプ
新型っぽくていい感じですよ。

「私はルイズ…私の声が聞こえたならば答えてください。私の優しい使い魔を…私は今、望みます！」

次の瞬間、凄まじい光に飲み込まれて、私は意識を失いました。

プロローグ 少女編（後書き）

プロローグ終了です！

第一話（前書き）

颯爽登場！！ ○革命！！

第一話

Side ルイズ

数時間後の保健室…

「ん…ん…う？…あ…れ…私…？」

ルイズはベッドの上で目を覚ます。

確か、サモン・サーヴァントをして…それで…あ、そっか…なん
でか一気に魔力を消費して意識が…でも、私にはまず、やらなきや
ならないことがある！

「知らない天井ね…」

「知ってる天井でしょ？」

キュルケさん、居たの？

いえ、もちろん知ってる天井だけど。

魔法を爆発させる度に気絶してここに運び込まれてるもの。

でもここは敢えてネタ的な意味でこの言葉が相応しいと思うの。

だからキュルケさん。

可哀相な人を見るような目を向けないで。

額に手を当てて熱を計らないで。

私は正常だから。
ふるふると顔を振ってキュルケさんの手を振り払う。

「おはようルイズ。大丈夫なの？」

その心配はもちろん倒れたことについてよね？
頭の心配じゃないわよね？

「大丈夫です。ところで召喚の儀はどうなりました？」

呪文を唱えて大きな爆発が起きて……そこから先の記憶が無い。
妙に魔力が持つて行かれたような気がしたような、しなかつたよう
な？

「あゝ……え」と

キュルケさんが妙に歯切れ悪いです。

……まさか。

「犬……ですか？」

工口犬、駄犬、盛り犬。

呼び方はなんでもいいですけど、私の中での抹殺対象その1です。

殺人？

知りません。

相手は犬ですから。

殺人ではなく駆除です。

「犬？じゃなくて人よ」

人…。

まあアレは見た目的にはそうですね。

そうですね。

やはり犬ですか。

ならあの犬はどこに？

今すぐ駆逐しなくては姫さまにもシエスタにも害が及ぶわね。

「ちよちよちよっと！杖持ってなににする気なのルイズ！？」

慌てて私の背中にしがみつくキュルケさん。

背中にふわふわぶにぶにが当たってます。

羨ましいです。

胸の無い私に対するイジメでしょうか？

「放してください」

「だからなににする気なのよ！？」

説明をしろと？

一言で言うなら…

「駆除…」

ですね。

「殺す気!？」

キユルケさんが反対してきます。

ですが私も今回ばかりは譲れません。

例え契約であつてもあんな犬に私のファーストキスを捧げるなんてイヤすぎます。

一緒の部屋で生活するなんて考え出せるだけでも悍ましいです。

そんなことを考えていた時でした。

「う…ここ…は…?」

彼の声が聞こえたのは。

S i d e ヴィストリア

頭が痛い。

身体がだるい。

まるで二日酔いになつたかのような不快感が全身を襲つ。

お酒なんか飲んでないはずなのに…。

ま、まさかツヴァイの呪い!？

ツヴァイめ。

さすが核弾頭並の危険さだね。いや、むしろDC兵器並の危険さ？

あれ？

DC兵器と核弾頭ってどっちの方が危険なんだっけ？

いや、そもそもDC兵器も核弾頭も古い？

今やガンダムの時代？

ってガンダムも割と古いような？

あ、初代は古いけど00ダブルオーはそんなに古くなかったっけ？

まあ僕は個人的には種運命のストライクフリーダムが好きだったり。

あとはアストレイ…とか？

オーブ最高です

って、あ、あれ？

なんか思考がズレていつてるような…？

はっ！？

巧妙な罠だ！

……………。

一人ノリツッコミは寂しすぎるね。

「こう言つときこそツヴァイのオーバーアクション気味のシッコミが欲しいのに。」

それにしてもなんだか周りが騒がしい。

そろそろ目を覚ました方が良いのかな？

僕はうつすらと目を開ける。

……………どこですか、ここ？

「う…ここ…は…？」

……………はっ!？

しまった!

言うてから気付いたけど、目覚めの言葉を間違えた!？

「ここは“知らない天井だ”って言う場面だったのに!？」

「「ひっ!？」」

近くで誰かの声が聞こえた…けどっ!

今は無視!

構ってられる余裕無し!

ああ…へこむ…。

なにに対してここまでショックを受けてるのか自分でも判らないけど、とにかくショックだ…。

「そう、これはまさにオイルショックにも匹敵するショックさだよ…」

…違うか。

確かオイルショックって石油が無くなるからってことで、トイレットペーパーがバカ売れした事件のことのはずだし。

あれって絶対に製紙会社やトイレットペーパー生産会社の陰謀だと思う。

……というかまた話が変な方向に…。

ひょっとして、僕ってツヴァイがいないとまともな思考も出来なくなってる？

これはもしかやツヴァイ依存症？

というかなんだかやけに静かなような？

いつもなら僕の思考にハッキングでもしてツヴァイからツッコミが来るのに。

ツヴァイの様子が気になって彼女の定位置である右手首を確認する。

……あれ……？

そこにはツヴァイが居なかった。

「うそっ！？なんでっ！？ツヴァイっ！？」

彼女が居ない。

彼女を生み出してからずっと一緒に居た僕の相棒がそこには居なかった。

さっきの比じゃないショックが僕を襲う。

そう。

まるで第三次世界大戦が起こっていたことに気付かず、気付けばいつの間にか終戦していたことを知らされた日本人のようなショックを受けた。

……我ながらこの例えはどうなんだろう？

そういえば人間界のゲームにスーパーロボット大戦とかいうゲームがあった。

第二次スーパーロボット大戦だとか第三次スーパーロボット大戦だとか。

第二次と第三次に出てくるキャラクターはほぼ変わらず。

外見も変わらず。

ということとは…？

彼等って短期間で戦争しすぎじゃない？

とかどうでも良いことを考えてみる。

うん。

また思考が変に歪んでるね。

これは早くツヴァイを見つけないと。

僕、普通に人と会話出来ないかも…。

その頃…浮遊大陸アルビオン・ウエストウッド村とか言われてるぶつちやけただの森では…

？「」…使い魔を召喚せよ！」

ヴヴンツ…

突如、有り得ないくらいに胸が大きな少女…ハーフエルフのティファニア…の右腕に小さなゲートが通過し、ティファニアの腕に見たこともない腕輪が付けられた。

「な、なに？腕輪？」

『っ……ここは……？』

「し、喋った!？」

『……知らない天………ヴィステイは!？』

喋る腕輪：ヴィストリアが現在探し求めているデバイス。

「うっうっ、腕輪が喋って……喋って……」

『とうか、ここどこなの!？』

「なにこれ!？なにこれえっ!？」

腕輪が喋った為、腕輪の付いた腕をブンブン振り回すティファニア。

『ウルサイわよっ!ちょっと静かにしてよっ!』

「ひうっ!?!?ごうごうごめんなぞ……」

腕輪に怒鳴られるという貴重な体験をしたティファニア。

『ていうかあんた誰よっ!？』

「え!？わ、私はっ」

『あなたの正体なんてどうでもいいわよっ!ヴィステイはどこよ!』
『?』

自分から聞いておいてこれだ。

「えう〜…聞かれたから答えようとしただけ…」

『そんなことよりヴィステイはどこよ!?!』

「ヴィ、ヴィステイ…って、なに?」

『役立たずっ!』

「ううっ…理不尽…」

ツヴァイ。

それが彼女の名。

彼女は、ヴィストリア以外話を通じないような”ヴィストリア至上主義者”…いや、至上主義腕輪。

ティファニアは、ヴィストリアに会うまでの数日、ツヴァイに振り回される運命を背負わされた不幸な少女だった。

『ヴィステイはどこ〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!』

「えうえう〜」

るーと涙を流し、これからの生活に嘆くのがあった。

第一話（後書き）

まさかの第一話でみんな大好きティファニア登場！！

ああティファニア…可愛いよティファニア…え？番組が違っ？

気にしたら負けさ。

第二話（前書き）

半年以上の更新遅れ申し訳ありませんでしたああああああ！！！！

しかも短いです！！

すみませんorz

加筆&修正しました。

第二話

side ルイズ

うう〜いきなり起きたと思ったら、こっちの事を完全に無視して
いるこの人は誰なのよ!?

…というより、あの犬はどこ?早く見つけないと私のシエスタが!
タバサが!姫様が!エロ犬に食べられちゃうじゃない!?

…でも、だからと言ってこの人を無視していいの?

…いえ、無視されてるのはこっちなんだけど…。

どうせ無視されてるならそのままスルで…。

ほら、触らぬ神に祟り無しって言いますし…。

とつか声掛けるの凄く怖いんですっ!?

「ねえ、ルイズ。」

そんな私に小声で耳打ちしてくるキュルケさん。

「な、なんですか?キュルケさん?」

変な事を考えていたのがばれました。

いえ、別に変な事じゃないですよ?

私は真剣にこの理解不能な現状を打開しようとしているだけなんですから。

「そうです。だから私は変な事を考えていたわけじゃないんです。勘違いしないでください」

「え？ルイズいったい何言ってるのよ？本当に大丈夫？」

「今の私、混乱状態です。どどど、どうしましょうキュルケさん！？」

「とりあえず落ち着きなさい。危機的な状況ほど冷静にならないと危険なの。それは判るわね？」

「今が危険な状況で、私が危険な状態だという事は判りました」

「ええ。それだけ判ればいいわ。それが判った所でルイズ……」

「はい？」

「彼を何とかしなさい。」

私にこれ以上危険な状態に足を踏み入れるとおっしゃいますか！？

あなた鬼ですか！？

「キ、キキ、キュルケさん！私いま結構いっぱいいっぱいなんですけどー！？」

「そうは言っけど貴女以外が彼をどうこつするわけにいかないでしょっ?」

「え、えつと…?」

「すみません、話が見えないんですけど…」。

「彼ね、”貴女が召喚したのよ”?」

……………え?

「え、えつと…すみません、今何と?」

聞き間違いかもしれないです。

そんな思いを込めて私は震える声で聞き返しました。

「だから、”彼”は、”貴女”が、”召喚”したのよ」

聞き間違いの可能性を悉く潰すかの如く一単語ごとに切って言うてくれるそんなキュルケさんが大好きです。

つまりそれはこの世界は原作とは違う世界と言う事で、目の前で取り乱す彼が使い魔と言う事で…。

「訳が判らない」

平賀才人の存在は?

ガンダールヴの存在は？

原作の通りに話は進むのか？

頭の中で”原作崩壊”の文字がグルグルと回っています。

原作通りにならないという事はゼロ魔の知識が役に立たないという事で、未来が判らないという事で、それはとても不安な事で。

助けを求めるつもりで側にいたキュルケさんに視線を向ける。

「人間の使い魔なんて聞いた事ないけど大丈夫。きっと何とかなるから。私も助けるから。だからそんな不安そうな顔しないの」

そっと私の頭を抱き寄せてくれるキュルケさん。

ふわふわする胸に包まれてふと気付く。

ああ…落ち付く…。

普段は自己主張しすぎる悪い胸だけれど、こうして抱きしめられると凄く落ち着く…。

って、そうじゃなくて。

”キュルケさんと仲良くなってる時点で原作と関係ないんじゃない？”

今更だけど。

そもそも本当にあの平賀才人^{エロ犬}が出てきたら駆除するつもりだったわけで…………。

既に手遅れでしたという事実にようやく気付く私。

「げ、原作がなによっ！いいわ。やってやるっじゃないのっ！」

こうなったら開き直ってやるわよ。

抱きしめられたまま気合を入れる私。

まだ彼の名前は知らないけれど…。

原作のルイズとサイト以上に良い関係になって見せようじゃないのっ！

彼の性格にもよるかもしれないけれど…ええ、大丈夫。

彼の性格は悪くないって私、信じるから。

「大丈夫。大丈夫だから…ね？ルイズ。」

「…キ、キュルケさん？」

なんだか凄く優しい…というか生温い声が頭の上から聞こえてくる。

更に抱きしめる腕に力がこもる。

「お願いルイズ。混乱するのは判るけど…これが現実なの。現実から目を背けないで」

あ、あれ？

ひよつとしなくても私、なにか勘違いされてる？

急原作云々に変な事言ったから頭が可哀想な事になった子として心配されっ
ちやつてる？

「あ、あのねキュルケさん？」

「いいの。今はなにも気にしなくていいの」

ああ！？加速度的にキュルケさんの中の私の人物像が大変な事にな
つていつてる気がするっ！？

「キュルケさん！私は大丈夫だから！もう大丈夫だから！」

「でも…」

「ちよつと予想外の事が起きて混乱しただけ！もう大丈夫だから！」

キュルケさんの胸の中でパタパタ暴れる私。

ほんとにこの胸どうなってるのよ！？

脱出できないんですけどっ！？

腕を外してえっ！

「彼の事もちゃんと認め…」

彼の方に視線を向ける私。

バツチつと視線がかち合う。

…ちよつと待つてほしい。

今の私の体勢は傍目から見てどうなんだろう。

巨乳の胸に顔を埋める私。

なかなか危険な状態では!?

「わぁ…百合な人つて初めて見た…」

そう勘違いされるとは思ったけれど、普通言っ!?

「ふふふ。この子は私にぞっこんなの。だから貴方にはあげないわ」

うん。キュルケさんも少し黙ろうか。

一難去つてまた一難。

本当悩みが尽きないです……ハア…。

side ツヴァイ

キュピーン

『はっ！？なにかすごく嫌な気配が！？』

「ど、どうかしましたか！？」

『うるさいわねっ！今あなたの相手をしてる余裕は無いの！』

「え？えっ！？」

『ヴィステイの周りに泥棒猫の気配がしたのっ！！！判る！？今すっごく一大事なのよっ！？』

「（え、えっと…今、相手にしてる余裕は無いって…）」

『聞ってるのっ！？何とかしなさいよっ！？』

「な、なんとかって言われても…」

『早くしないとヴィステイがどこの誰とも知れない女に取られちゃうでしょっ！？それが判らないのっ！？』

「え、えっと、ヴィステイさんの危機って事ですか？」

『さっきからそう言ってるでしょっ！？あなたの耳は飾りなの！？そしてその胸はなんなのよ一体っ！？』

「む、胸は関係ないですよっ！」

『あなたの胸の話題なんてどうでもいいわよっ！』

「支離滅裂ですよ…」

『良いからさっさとヴィステイの所に連れて行きなさいよっ！その胸、切り取るわよ！？』

「ふ、ふえ〜ん…ヴィステイさん助けてくださいあい！」

side テイファニア

『ヴィステイーーーーー！！早まっちゃ駄目よ！？』

えっと…彼女？は一体何を感じ取っているのでしょうか？

それより、本当に”ヴィステイ”さんって何者なんですか？

彼女？と同じ腕輪なのでしょうか？

こんな風に捲し立てる腕輪が他にもたくさん有るのでしょうか？

……想像したくありません。

でも、彼女？も困っているようですし…だけど…

私は…人の前に出ていけないですし…

でも困ってる人…腕輪ですけど…放っておくわけにもいかないですし…

「私、どうしたら…」

『だからヴィステイの所に連れて行けって言うてるでしょう！？馬鹿なの！？死ぬの！？胸にばかり栄養取られて頭おかしくなってるじゃない！？』

む、胸に栄養取られちゃってるんですか？私？

「ううゝ…でもお、私、ヴィステイさんがどんな方が全く判らないんですけど…どこにいるかも判りませんし…」

『そんな事はどうでもいいのよ！！乳お化けがヴィステイを理解する必要は無いわ！！』

私、胸お化けから乳お化けにされちゃいました。

私の胸って、やっぱりおかしいのかな？

「私、そんなに胸がおかしいですか？」

『それこそどうでもいいわよ！？今はあんたの胸の事なんかで口論してる場合じゃないの！判る！？』

そんな事言われても…（悲）

『ああもあ！！テレポート使いたくても私の魔力スツカラカンじゃないの！？誰よ！私の魔力空にしたの！出発前にはヴィステイのフルーティ且つスイーティーな魔力に包まれていたのに、最悪な気分だわ！！』

えっと…テレポートって何ですか？

それがあれば、私はこの腕輪さんから解放されるんでしょうか？

嬉しいような…悲しいような…淋しいような…

第二話（後書き）

はい、初っ端から原作崩壊してみました。

平賀才人に関してですが：名前だけで終わるかもしれないし、他の虚無の使い魔として出るかもしれないの半々です。

ほんと、大変長らくお待たせして申し訳ありませんでしたorz

第三話（前書き）

長らくお待たせしました！！

本当に申し訳ありませんでした！orz

本来なら、夏休み中には出来ていたのですが、なかなか踏ん切りが
つきませんでしたorz

では、どうぞ！

第三話

それから数十分……

side - ルイズ

「はあ~~~~」

彼に百合ではないとわかってもらうのに結構な時間が掛かったわ。

会って間もないのにこんなに振り回されるなんて…。

まさかこれが主人公補正というもののなの？

物語として見る分には楽しいけれど、当事者になると結構大変よこ
れは…。

とりあえず、今は確認するべきことをハッキリさせないと…。

「とりあえずアナタのこと少し教えてもらえるかしら？」

「あ、僕はヴィストリアって言います」

よしっ！

平賀 才人じゃないっ！

私は思わずガッツポーズ。

「え、ええつと…」

はっ！？

変な目で見られてる！？

「コホン。続きをお願い」

喜ぶのは後。

平賀 才人ではないのなら彼は何者なのか。

もつと情報が必要ね。

「あ、うん。続けるね。住んできた所は闇ヶ谷やみがたにって場所。ここに来たのは旅に出ようと一歩踏み出したら、召喚門に沈んじやったから」

闇ヶ谷？聞いたこと無いわね？

ハルケギニアには無い名前だし、私の元いた世界にも私が知ってる地名にはないわね。

「ヴィストリア…さん…？って呼べば良いかしら？」

「あ、ヴィステイで良いよ。いつもそう呼ばれてるからそっちの方が良い」

「そう。ならヴィステイって呼ばせてもらうわね。代わりに私のこととは…っていけない。私の自己紹介がまだだったわね」

情報収集に霧中になりすぎて礼儀がなつてなかったわ。

名乗られたのに名乗らないなんて失礼よ。

「ごめんなさい。私はルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。長いからルイズって呼んでくれていいから」

「……………？」

なんか彼が固まっちゃったわ。

どうかしたのかしら？

side - ツヴァイ

ぴくっ

『……………なにかしらこの心底世界を怨みたくなるほどの不快感は……………まるで大切な聖域に土足で踏み込まれた気分だわ……………この感覚……………そう……………どこの腐れ蛆虫か知らないけれど、私のヴィステイの愛称を軽々しく呼んだのね？ああ……………本当に忌ま忌ましい……………ヴィステイ以外の生命体なんて全て消えてしまえば良いのに……………』

「ひっ!?!?」

乳お化けが怯えているけれど、今はそれどころじゃない。

『ヴィステイは私の者で私はヴィステイの物なのに……私たちの間に土足で踏みいるなんて本当に良い度胸してるわね……。千回殺してもまだぬるいわ……。地獄の業火で永遠に焼かれ続ければ良いのよ……そうね……その明かりの元で私たちは愛を囁くの……汚らしい蛆虫の死骸でも燃やせば少しは私たちの世界にも彩りを添えてくれるわ……ええ、そうしましょう……ヴィステイはきつと褒めてくれる……たくさん撫でてくれる……それはとても素敵……とてもロマンチックだわ……うふふふふふ……』

「じ、恐すぎますよう……」

side - ティファニア

あううう……なんだか腕輪さんから不穏を通り越して呪詛的な何かが溢れ出してきます……。

震えが止まりません……。

鳥肌が収まりません……。

何だかとっても危険な気がしてならないです。

は、早くヴィステイさんって方を見つけないと、大変な事になる気がします……。

side - ルイズ

「……え？る、ルイ…えと…もう一度お願いします」

多量の冷や汗を流しながらルイズに頭を下げて聞き直すヴィストリア。

「まあ、長い名前だしね。ルイズで良いわよ。」

「あの、えと…失礼な事聞くけど…^{ゼロ}虚無のルイズ…さん…でしようか？」

「!?…なんで、この子がその事を!？」

私、そんなに有名なの？　そこまで有名になる程無能なの？

「あら？ルイズ。あなた学院の外でも有名みたいね？ん？でも、少しニュアンスが違った気がするけど…？」

隣で聞いていたキュルケがそう聞いてきた。

「あの…ルイズ…さん？平賀才人って人居ますか？」

「いいえ。居ないわ。居てたまるもんですか！あんな変態ドスケベ優柔不断エロ犬なんて!!」

「あう！ご、ゴメンナサイ…」

ルイズのあまりの剣幕にビクビクと子犬のように萎縮してしまうヴィストリア。

「私は聞いた事ないけど…ルイズは知ってるの？その…ひ、ヒリガル・サイトーン？って人」

「キュルケさん。気にする程じゃないですよ？寧ろ気にしては駄目です。というより、存在自体認めては駄目ですから！」

そこまで否定される平賀才人に合掌。

「ああ、因みに私はキュルケ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーよ。キュルケでいいわ。よろしくね？」

「あ、はい。よろしくです。（間違いない…ゼロの使い魔の世界…でも、どうして？確か原作では、ルイズさんとキュルケさんは仲が悪いはず…並行世界？…あれ？でも、今ルイズさんは平賀才人を居ないと言った。知らないとかじゃなく居ない。まるで、その存在を知っている…？）」

ヴィストリアはのめり込む様に思考に耽る。

「どうしたの？難しい顔して…？」

キュルケがヴィストリアに問いかける。

「はっ！いい、いえ、気にしないでください。ちょっと混乱しただけですから！」

「そっ？なら、良いけど…」

「はい。心配してくれて、ありがとうございます」

キュルケの配慮に、笑顔を以て礼を返すヴィストリアだった。

コンコン…

不意に扉をノックする音が響く。

「あら？こんな夜更けに誰かしら？開いてますよー」

ガチャ… キイ〜

ルイズが許可を出すと扉が開く、するとそこには小柄で鮮やかな青髪と大きめの眼鏡をかけて、身長より長い杖と本を持った少女が立っていた。

「タバサ。どうしたのこんな時間に？」

「ルー姉が心配で、様子を見に来た。」

入ってきた少女の名はタバサと言うらしい。

そして、ルイズの事をルー姉と呼んだ。

「ありがとう。ごめんね？心配かけて…」

トコトコとタバサが近づいてきたので、頭を撫でるルイズ。

「あ、ヴィスティ。この子はタバサ。ちょっと口下手だけど、とっても可愛い子よ？」

「ルイズさん…やっぱり百合…」

「違うから！私百合じゃないから！！ちゃんと男の子も好きだから」

「もって事は…女の子も好きで男の子も好き…両刀？」

「そうじゃなくて！あ~~~~また変な誤解されてるうっうっうっ！！」

かくして、ルイズによるルイズの為のヴィストリア説得が再び始まったのである。

そうして更に1時間後…

「っ…疲れたorz」

説得による満身創痍でベッドにグダ〜とするルイズ。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ…大丈夫よ…うん。大丈夫…」

全てはヴィストリアのせいなのだが、全くもって本人は理解していない。

「さて…もう遅いし、そろそろ寝ましょう。私も部屋に戻るわね？」

「お休みなさい。ルー姉」

「あ、はい。お休みなさいキュルケさん。タバサ。」

「お休みなさい。」

キュルケとタバサは保健室を後にした…

「ルイズさん…」

「うん？どうしたのヴィステイ？」

ヴィストリアの真剣な表情にルイズも顔を引き締める。

「貴女は…」 本当にルイズさんなんですか？」

「……え？（まさか、か…ヴィステイは…もしかして）」

ヴィストリアのまさかの発言に茫然となるルイズだった。

第三話（後書き）

次は正体ばらしですかねえ

第四話（前書き）

なんか早々に続きが書けました。

いつもこのぐらいのペースで執筆出来ればいいのですが…

本当に、読者の方々にはご迷惑をおかけしてますorz

さて皆さま……メエエエリイイイクリスマスアアアアアアス……！！
！

第四話

side - ルイズ

「あなた……一体……？」

うまく思考が働かない。

今彼はなんと言った？

” 本当にルイズなのか？ ”

ヴィステイは…… “ 本当のルイズ ” …… を知っている？

どういふこと？

彼も転生者？

それとも、私とは違うトリップした人？

わけが判らない。

きっと今の私は呆然としたマネケ顔で彼の顔を見ているのだろう。

ふと彼の紅い瞳が目に入る。

自分のルイズとしての皮を透過し、その下の “ 本当の私 ” まで届き

そうなの視線。

まるで一点の曇りも無い綺麗なルビーのような瞳がまるで今の“ルイズとしての私”を消し去る魔石に見えた。

「……………あつ……………」

ふと声が漏れた。

それと同時に今のルイズとしての自分が消えていくような錯覚を覚えて、自らの身体をギュッと抱きしめる。

背中に冷や汗が流れる。

全身の肌が粟立あわたつのが判る。

心臓が狂ったように暴れまくっている。

怖い。

あの眼が怖い。

人の視線にこれほどの恐怖を感じたことはなかった。

なのに眼が離せない。

まるで見入られたようにその瞳から視線を動かすことができなかつた。

「ルイズさん？」

声をかけられてハツとする。

それと同時にあの瞳の拘束が外れた気がした。

カクン、と視点が落ちる。

膝から崩れ落ちたのだと気付いたのはペタリと床に座り込んでしまつてからだつた。

「えっ！？ちょ！ル、ルイズさんっ！？」

慌てて駆け寄るヴィステイ。

焦った声に顔を上げるとそこにはやはり先程の紅い瞳。

だが、そこには先程までの真実を知ろうとする意志は無く、純粋な心配の色だけがあつた。

「い、ごめん…ちょっと待って…」

先程までの恐怖はない。

だが未だに暴れ回る心臓を落ち着けるのに少し時間が必要だつた。

ルイズSIDE END

数分後…

「落ち着きましたか？」

「……………うん……………」

「ごめんなさい。なんだか、変な事聞いてしまったみたいで……………」

「あ……………えと……………」

気遣いの声にルイズは声を詰まらせる。

こうしてヴィステイと二人きりになり、意識が彼に集中したことでルイズは理解する。

彼がとても純粹な人である、と。

彼の瞳があまりに真っ直ぐ過ぎるのだ、と。

現に今、座り込んでしまったルイズの背を撫で、介抱しているというのに、彼の瞳には女性に触れていることに対する劣情の色は一寸けからも見えない。

純粹に心配をし、気遣ってくれているのだと簡単に判ってしまう。

先程の恐怖した視線もそうだったのだろう。

彼は純粹にルイズのことが知りたかった。

だが、ルイズは無意識にその視線を忌避きひした。

この世界での“ルイズ”としての立場を崩されてしまう気がしたか

ら。

そのやりとりがルイズに計り知れない恐怖をもたらしたのだ。

だが、ルイズは彼の純粹さを理解できた。

同時に彼の中にある優しさも。

なぜか彼にならずべてを話しても大丈夫な気がした。

会ってまだ一日も経っていないにも関わらず。

そんな自分を不思議に思いながらルイズは決意する。

彼にすべてを話すことを。

「…聞いてもらえる？私のすべてを」

そうしてルイズは、これまでの経緯をポツリポツリとだが事細かく話し出す。

「…つまり、亜紀さ…じゃなくて、ルイズさんは”転生者”って事？」

「うん。最初は凄く戸惑ったよ…身体中が痛くて、動かなくて…意識が遠のいて…気付いたら…赤ちゃんになってたから…」

「うん…戸惑うねそれは…（追いかけて足滑らせて階段から落ちて

死んだと思ったら赤ちゃんになりましたって…本当にそんな経験する人がいたなんて…」

「ヴィステイは…」

「はい？」

「ヴィステイは…あなたは何者なの？」

「僕？」

「うん。闇ヶ谷なんて聞いた事ないから…闇ヶ谷って、どこにあるの？名前に日本のどこかだっというのはわかるんだけど…」

「えっと…日本じゃなくて魔界なんだけど」

「……え？」

固まるルイズ。

「ですから、魔界。」

「……え？」

ルイズのフリーズは続く。

「あ、あれ？魔界って伝わらない？おかしいな？魔界って方言なのかな？えっと…えーっと…標準語で魔界って何て言うんだっけ？」

伝わらなかったと勘違いするヴィステイ。

「えつと…ヘル…は地獄だし…パンデモニウム…？…えーつと…」
軽く混乱しているヴィステイ。

先に正常に戻ったのはルイズだった。

「えと…魔界？…背がちっちゃくて年齢が1300歳超えてて上半身裸で高笑いする触角の髪が特徴的な魔王が居るあの魔界？」

「ラハールくんのこと…かな？」

「魔界戦記デイスガイア？」

「…？何それ？」

「私の世界にあった小説・ゲーム・アニメ・漫画になった最凶やり込みゲーム。」

「へえ…僕の世界って、ゲームなんだ…」

「でも、少なくとも私はヴィストリアなんてキャラクターは知らないよ？」

「ん…もしかしたら、亜紀…ルイズさんが転生した弊害へいがいとか？」

「……言い直さなくてもいいよ？」

「う…うめん…」

「あ、ううん。気にしてないよ。ところで…弊害って?」

「うん。もしかしたら、僕もイレギュラーになるのかな?って…大谷亜紀という存在が、ルイズさんに憑依転生する事で、ゼロの使い魔本来の物語が並行世界の物として世界が認識して、その為に”ルイズの使い魔”サイト”という式が成り立たなくなつて、”ルイズとなつた亜紀の使い魔””という式が出たんじゃないかと…」

「…じゃあ、ヴィステイは、私の使い魔になる為に生み出されたイレギュラーかもしれないって事?」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。”世界”って言うのは、僕達のような生きる者や、神ですら認識できない”真理”と言えるものだからね。世界がそう望んだのか、それとも、最初から決まっていたのか…それは誰にもわからない事だからね」

「ううううう…難しすぎてよくわかんない」

「大丈夫だよ。僕も判ってないし。今のは僕の憶測だしね」

「ふうん…ねえ…ヴィステイは、魔界に住んでたつて事は…悪魔なの?」

「ううん。僕は魔族だよ?」

「…?何か違うの?」

「悪魔って言うのは、魔族の中で罪を犯した罪人につけられる称号なんだ」

「そうなの？」

「うん。人間界では悪魔も魔族も一緒に考えられたりしてるけどね」

「私も同じだと思ってた…」

「意外と人間界には間違っただけで伝えられてることが多いんだよね。たとえば、よく死神と悪魔を一括りで言われてたり」

「え？死神って悪魔じゃないの？」

「うん。死神は神族だから魔族や悪魔とは別物。その点では墮天使に近いかもしれないね。人間界では死神が現れると死ぬって考えるみたいだけど、それも間違い。”死神が現れるから死ぬ”んじゃないで、”死ぬから死神が現れる”なんだよ？」

「それって、よくお年寄りが言う”お迎えが来た”みたいな？」

「うん。まさにその通り」

「へえ…あ、じゃあヴィステイはどんな称号なの？」

「僕の？」

「ええ。ちょっと興味あるし。」

「えと…その…う。」

尻すぼみする様な小さな声で答えるヴィストリア。

「え？ごめんなさい？よく聞き取れなかったんだけど？」

「えっと、ね…魔王。」

「……わ、わんもあぷり〜ず？」

動揺して下手な発音で聞き返すルイズ。

「魔王…一応…ラハールくんと同じ…」

恥ずかしそうに、しかし寂しそうに答える。

「……………はい？魔王？」

「…うん。」

「……………え！ちよっ！？はあっ！？全然見えない！？」

「う…よく言われる…」

「どうみてもメイドじゃないの！？見た目、女の娘だし！？」

「う…それもよく言われる…」

「ああ、やっぱり…」

納得するルイズ。

「僕もいつの間にか魔王になってて戸惑ったし…魔力構成とか魔法

創造は得意だけど魔力量調整とかはかなり苦手なへっぽこなの…別に部下とかもないし、魔界を治めているわけでもないし……」

「ち、ちなみに、どのくらいの力を持つてるの？」

「えと…さつきも言ったけど僕、実は魔力量の制御が苦手で…0か50か100かしか出せないというへっぽこ具合でして……」

「全力だとどうなるの？」

「一国が地図から消えます……」

「国単位！？核ミサイルが可愛く見えるわよ！」

「え？でも核ミサイルと違って放射能汚染とかないからむしろクリーンで……」

「破壊可能範囲を言ってるの！！」

「実は地球のアトランティスとムー大陸が無くなったのって僕が魔力全開放出しちゃったから……」

「まさかの幻の大陸消滅の原因が目の前に！？」

「……という冤罪をツヴァイにかけられた。僕、やってないのに……」

「やってないの！？紛らわしい言い方しないでよ！！」

「ちなみにアトランティスの住人はムー大陸の生き残りの人達の子孫だとか……」

「どうでも良いわよそんな雑学はっ！」

「参考までに言っておくけど、魔力量半分くらいなら…秋葉原を崩壊出来るよ…」

「なんで秋葉原限定なの！？なんでムー大陸破壊の半分の魔力を使いなから秋葉原限定！？ムー大陸って確か結構大きくなかった！？破壊可能範囲的には小国の日本くらいは消し飛ぶでしょう！？」

「いや…まあ破壊可能範囲的にいえば確かに日本くらいは消せるんだけど…」

「でしよう！？」

「だけどきつとその場合、”秋葉原だけ”は堪え切るんだらうなあ…」

「秋葉原にどんな偏見持つてるの！？ただの電気街じゃない！」

「忠告しておくよ。秋葉原を甘く見ないほうが良い…」

「いったい秋葉原でなにがあつたの！？魔王ともあるう人がそこまです警戒する秋葉原ってなんなの！？」

「秋葉原…あそこは…魔界だ…」

「魔界在住の人に魔界認定された！？」

「それに秋葉原には様々な能力者がいるし…」

「いないからっ！秋葉原はそんな魔境じゃないからっ！」

「そんなことないよ。だって僕、秋葉原で邪気眼っていう魔眼を持った人に会ったし……」

「ただの中二病患者だからっ！別に能力者じゃないからっ！！」

「幸いその時はまだ使う時じゃなかったらしくて僕は助かったんだけど……」

「発動なんてしないからっ！ってなんで私たち秋葉原についてこんなに熱く語ってるの！？」

「まあ熱くなってるのはルイズさんだけだね」

「誰のせいなのかな！？っていつか続きは！？」

「ああ、うん……あれ？なんの話だっけ？」

「魔力量の話よっ！」

「ああそうだった。全力で国単位、半分で秋葉原……」

「秋葉原は譲る気ないのね……」

「あ、秋葉原といえば……」

「もう秋葉原はいいからっ！！続きを話してよっ！！」

「ああ、うん。それで、危険すぎるから、アインを作ったんだ」

「アイン？」

「この子。僕の付けてる指輪。デバイス魔術補助機構兵器で、一応ストレージ型。」

「ちよつちよ！ちよつとまって！デバイス！？まさかりリカルでマジカルな魔法で魔砲少女に出てくるデバイス！？」

「うん。リリカルなアレに出てくるデバイス。アインは補助目的だから防御と収納ヴァーチャルリアリティと仮想現実を詰め込んだから、思考回路AIは入ってない。だけど、ユニゾン機能があるよ。」

「ユニゾンできるの！？ストレージ型なのに！？」

「うん。まあつまり本気を出すと全部無くなっちゃうから、ツヴァイが居ないと本当の意味で本気は出せない…んだ…けどね…ううう…ツヴァイ…どこ行っちゃったの…？もしかして、僕に愛想が尽きたの？」

「だ、大丈夫よ！きつと何かの手違いなんだよ！ツヴァイって娘のこと、私もなにか協力できることないか考えてみるから。だから今日はとりあえず休みましよう？」

?????SIDE

真つ暗な部屋。

飾り気のない部屋の中心にキングサイズのベッドが置かれている。

そのベッドに眠るのは一人の少女。

ふと、寝苦しそくに眉をしかめる。

『……………』

ぱちりと開くルビーを思わせる綺麗な双眼。

『……………?』

なにか違和感があるのか首を傾げる。

ムクリとベッドから起き上がり、周囲を確認するように見渡す。

その少女の手にはいつの間にも手に取ったのか真っ白なスケッチブックが。

『……………?』

クンクン。

可愛らしい鼻をひくひくさせるその様は子犬のよう。

『……………いない?』

サラサラとスケッチブックにサインペンが踊り、魔界の文字を記していく。

それは筆談。

『……匂い、しない？』

そしてなにかを確かめるように眼を閉じ、意識を集中させる。

『この世界にいない……どこ？』

眼を開き虚空を睨みつける。

そしてフフ…と控えめな笑み。

『……見つけた』

眩きと共に、少女の姿は掻き消えた。

第四話（後書き）

次回……波乱の予感……？

第五話 ギーシュ登場辺りを修正しました。(前書き)

大変長らくお待たせいたしました!!!

読者の皆さま方には大変ご迷惑をおかけして申し訳ありません!!

第五話 ギーシュ登場辺りを修正しました。

ルイズとヴィストリアは保健室からルイズの部屋へと移り、就寝する事にした。

別にそのまま保健室で寝ていても良かったのだが、いつも迷惑かけているので、今回は戻る事にしたのだ。

「ここが私の部屋よ。どうぞ」

木製の扉を押し開き、ヴィストリアに室内へ入るように進めるルイズ。

12畳ほどの広めの部屋に、シンプルなベッド、クローゼットにタンス、鏡台、丸いテーブルに、椅子が三つ。

広くて丸いテーブルがある以外はごくごく普通の部屋だと思われる。

「特に、これと言って何かあるわけじゃないけど……」

「そう？ シンプルで良いと思うよ」

「ありがと。さ、もう遅いし、早く寝ましょ？」

「だね。申し訳ないんだけど、毛布を一枚貸してくれる？」

ヴィストリアがそう聞いてきた。

「毛布？」

「風邪ひくことはないとは思っただけど一応ね」

「……………？ヴィステイどこで寝るつもり？」

「え？その辺？」

ヴィステイは鏡台の横の壁を指差す。

「……………なんで？」

「え？なんでって…一応使い魔だから同じ部屋にいたほうが良いかなって思っただけけど…」

「じゃなくてなんでそんな所で？」

「えっと…？」

「ベッドで寝れば良いでしょ？」

「……………？あれ？じゃあルイズさんはどうするの？」

「え？そりゃ私もベッドで寝るけど」

「……………？？僕は？」

「だから一緒に寝れば良いじゃない」

なにを言ってるの？とでも言いたげにヴィストリアを見るルイズ。

「えっと…女の子と一緒にベッドに入るのはちょっと…僕なら、毛布さえ貸してもらえれば床で大丈夫だし」

「本当に大丈夫？」

「うん。平気。」

「本当に？」

「慣れてるし」

そういつて、ルイズから毛布を受け取って、身体を包んで壁に背を預けて腰かけるヴィストリアだった。

「寝苦しかったらベッド入ってきて良いからね？」

「あはは。ありがとうルイズさん」

軽く笑うと毛布に包まるヴィステイ。

「それじゃお休み、ヴィステイ」

「お休みなさい。ルイズさん」

翌日…

朝、珍しく早めにルイズが起きだして、ヴィステイの方を見る。

「結局ベッドには来なかったのね」

少し苦笑しながら毛布に包まれて眠るヴィストリアを眺める。

ふわふわの毛布が気持ちいいのか

「にへへ…」

と、あどけない顔を毛布に埋める。

それを見てルイズは…

「これで本当に魔王なんて…小動物にしか見えないわ」

ヴィストリアの寝顔に癒されるのだった。

そこへ…

コンコン…ガチャ…

「おはようルイズ…ズ？」

キュルケがルイズを起こし入室してきた。

床で眠るヴィストリア。

そのヴィストリアを見ながらニヤニヤするルイズ。

「あ、おはようキュルケさん」

入ってきたキュルケに挨拶を返す。

が、キュルケの様子がおかしい。

フルフルと肩を震わせ、眉にシワが寄る。

「ルイズ！あんたってば、どんな性癖してるのっ!？」

と叫ぶキュルケ。

「ふえ!？」

ルイズはパニックになる。

「いたいけな男の子を毛布一つで転がして、そのあどけない寝顔を見ながらニヤニヤするなんてどれだけマニアックなのよあなたっ!？」

「なんの話!？」

「そんなのあたしの知ってるルイズじゃないわよっ!」

「ちょっと落ち着いてキュルケさんっ!」

「あたしの知ってるルイズはもつと純粹無垢で真っ白で天然ボケでぼやんとしててポンコツな可愛い女の子なのよ!？」

「私、今までキュルケさんにそんなふうに思われてたの!？」

「ああ…どうしたらいいのよ…こんなポンコツじゃない内容じゃ、タバサに話して一緒に笑えないじゃない…」

「ポンコツな内容だったら話してるの！？たまにタバサと出会い頭に笑われると思ったらそれが原因！？」

その時、ふわふわの毛布がヴィストリアの鼻を撥り…

「…くしゅんっ！」

くしゃみを一つ。

「風邪引いたらどうするの！？」

キュルケは更にヒートアップしてルイズに説教を始める。

「ち、違うの！キュルケさん！誤解なの！」

「なにが誤解よ！？現に彼、冷たい床で寒さに震えてるじゃないっ
！」

「私、昨日ちゃんと一緒にベッドに寝るよつに言ったのっ！」

「知り合ったばかりの殿方と一緒にベッドに入るなんてあなたどれだけ淫乱なのよ！？」

「私にどうしろと！？それにそんな邪な感情なかったわよ！」

「でも現に彼は床で寝てるじゃない！」

「そ、それは彼が…」

「『お願いします』って言った所、あなたが『あんなんか床で十分よっ！その辺で勝手に寝てなさいっ！』って言ったのね!？」

「キュルケさんの中で私、どれだけ悪女だっと思われてるの!？」

必死に弁明するルイズに、妄想が暴走していくキュルケ。

そんな時、

「んみゅっ?」

可愛らしい声を出しながら目を覚ますヴィストリア。
どうやら二人の叫び声で起きてしまったらしい。

ヴィストリアが起きたので、キュルケに状況説明。

「と、言う訳で、僕が自分から進言したんです。」

「あら、そうだったの。ごめんなさいルイズ。私ってば早とちりしちゃったみたいで…」

「いえ、私も、誤解されても仕方ない状況だったし…」

きゅる〜

ヴィストリアの方から可愛らしい音が聞こえた。

「／／／／／／」

「くすつ…お腹空いたの？」

ルイズがヴィストリアの反応を見てクスリと笑う。

「あ…その…よく考えたら、昨日から何も食べてなくて…」

「…そう言えば、私もね」

召喚した時から気絶してたルイズと召喚された時から気絶してたヴィストリア。

ある意味お似合いかもしれない。

「それじゃ、タバサの部屋によってから食堂に行きましょう？」

「はい。」

「わかりました」

キュルケの提案に素直に従うルイズとヴィストリアだった。

タバサと合流してから食堂に付いた四人。

ハリー・オッターに出てくる食堂と変わらない光景が目映った。

「広いね…」

「三百数人くらいいるから、この位広くしないと入りきらないのよきつと…」

と、ヴィストリアの問いにルイズが答えた。

「ヴィステイは私の隣ね？」

「うん。」

「おい！そこは僕の席だぞ！平民が軽々しく…す…わる…な…？」

金髪の少年が座ろうとしているヴィストリアをみて叫ぶが、ヴィストリアの顔を見て固まった。

ルイズが言っていた通り、ヴィストリアは美少年だ。

しかし、その顔立ちからよく美少女に間違われる。

そして、金髪少年はヴィストリアを見て頬を赤く染めていたのだ。

「あ、すみません。今どきます。」

そう言って、立ちあがろうとするヴィストリア。

「大丈夫よ。昨日の内に私が知らせておいて、席を増やしてもらってるから」

そう言ったのはキュルケだ。

キュルケは気絶したルイズの代わりに、使い魔の申請を行っていたのだ。

ヴィストリアが人であると言う事を知っているので、ルイズならそうするだろうと当たりをつけたキュルケが前もって伝え、席を増や

して貰ったのだ。

「だから、心配しなくても大丈夫よ。男の子でしょ。どんと胸を張りなさい。」

「お、おと…こ…?」

金髪少年はヴィストリアを再び見て絶句した。
自分は、今、男の子にときめいてしまった事によるショックだ。

「僕の純情を踏みにじったなああああああ!?!?!?」

「えう!?!いきなり何ですか!?!?」

金髪…もとい、ギーシュはヴィストリアに怒鳴った。

ギーシュは俗に言うナルシストだ。

女子の人気はそれなりにある。

だが、彼は勝手に勘違いをして勝手にときめいて、自分勝手に怒鳴ってきた。

自己中心的にも程がある。

「お前は僕を怒らせた!決闘だ!!!」

「止めときなさいよギーシュ。貴方じゃ逆立ちしたってヴィステイには勝てないから」

「勝ち負けは兎も角、なんで決闘になるのよ」

「…筋力、学力、容姿に自信がないから魔法でねじ伏せようとする」と、タバサが呟く。

「弱い男の醜い悪あがき…」

ドギツイ言葉でギーシュに毒を吐く。

ギーシュは真っ赤になってヴィストリアに薔薇の造花を向ける。

「もう許さん！！君！僕と決闘だ！そして、僕の純情を踏みにじった事を後悔させてやる！」

「いや、だから何の事ですか！？」

「どこまでも惚ける気かつ！ふんっ！まあいい！ヴェストリの広場で待っている！逃げようなどと思うなよっ！？」

そう言っつて、ギーシュは一人、ヴィストリアの返事も聞かずにヴェストリの広場へと向かった。

「僕にどうしろと……」

ヴィストリアはため息をついたのだった。

第6話 ここからR15です。……多分。(前書き)

お待たせしました!!

遂にふんぎりがついたので投稿をば!

第6話 ここからR15です。……多分。

ギーシユの姿が見えなくなると、ルイズがその場を仕切り直そうと切り替える。

「……まあ、とりあえず……ギーシユの事は放っておいて、朝食にしましょう。決闘を受ける、受けないにしても、お腹が空いてちゃ何もできないし」

と、ルイズの言に従い、ヴィストリア達4人は朝食をおいしく頂いた。

因みに…

タバサはその小さな体のどこに入るのかが不思議だが残さず全て食べた。

キュルケは、極力残さないようにはしているが、腹八分目で抑える。

ただし、残すと言っても、食いかけを残す様な事はしない。

食べる分だけとりわけ、残りをタバサに献上した。

ルイズとヴィストリアは…

ルイズは、体に見合った分しか食べないので、いつも半分残ってしまふ。

その為、ルイズとヴィストリアでキッチリ半分ずつ分けて食べた。

椅子は増えていたが、食事の用意は間に合わなかったので都合が良かったとも言える。

そして…約1時間後…ヴェストリの広場。

「……………遅い！！！！いつまで待たせるんだ！！」

ギーシュは憤慨しながらヴィストリアに怒鳴った。

「す、すみません…昨日から何も食べてなかったからお腹空いちや
つて…それに、朝食を抜くと1日の活力がでないですし…」

「お腹が空いているのは僕も同じだ！こっちは食べないで来てるん
だから、君も食べないでくるのが礼儀と言うものだろう！」

「……………正確な時間と食事云々を指定していないあなたが悪い。」

と、ギーシュの反論をタバサが正論で返した。

「君は黙っていたまえ！これは僕と彼の問題だ！」

「あなたが勝手に勘違いして、彼を巻き込んでいるだけ。彼に落ち
度はない。」

「うぐ…と、とにかく、彼は僕の純情を踏みにじった！許すわけに
はいかない！」

「だからそれはギーシュが勝手に勘違いしたんじゃない！そ、そり
ゃあ…最初は私も女の子って言うかメイドっぽく見えちゃったけど
…」

ルイズもルイズで他人の事は言えなかった。

「諸君！！決闘だ！！！！」

結局、ギーシュはヴィストリア本人の了承も得ずに決闘を宣言した。

「うっうっ…僕の意見は……」

半泣きで訴える。

「なあ？ギーシュのあれ、どう思う？」

「どう思うもなにも、自分の主張を一方的に押し付けて女の子に迫る悪漢の図、だろ？」

「俺もそう思う」

外野から聞こえてくる話し声に異色が混じりはじめる。

「ギーシュ様…昔は格好良いつて思っていたけれど、同じ女性としてあの姿は認められないわ。あの娘、可哀想…」

「私もそう思うわ。昔の私ってばあんな男のどこが良いって思ってたのかしら…」

ちらほらと聞こえてくるギーシュに対する非難の声。

当然その声はギーシュ達にも聞こえている。

「皆ちよっと待ってくれ！誤解！君たちは誤解しているんだ！」

ギーシュの必死の声に一瞬周りの声が止む。

「君たちは誤解している！こいつは女なんかじゃない！男なんだ！」

静寂。

「……………ギーシュ」

周りのギーシュの見る目が冷たくなった。

「言い逃れにしてもそれは酷いぞ」

「女の子に向かって“男だ”ってのはいくらなんでもないだろう……」

「ギーシュ様…最低です……」

「なんて暴言かしら……」

口々に巻き起こるギーシュに対する非難の数々。

「だから待ってくれ！どうしてそうなるんだ！あいつは本当に男なんだよ！」

ギーシュが顔を真っ赤にして叫ぶ。

「わかったわかった。とりあえずあの娘を男だと仮定しよう。それで、その男（仮）とのこの決闘の発端はなんなんだ？」

「くっ！仮定ではないというのに！だが良いだろう！聞かせてあげようじゃないか！事の発端を！」

説明中……

「……………ギーシュ」

説明が終了した途端、ギーシュに向けられる非難の目の嵐。

「要約すると見目麗しい美少女が居たから声をかけた…」と

「話してみたら男だった…」と

「それで騙されたって言って決闘をする…」と

「バカじゃないの？」

「なぜ僕が非難されるんだ!？」

「どこから見てもお前の勘違いであの娘に絡んでるだけじゃないか……」

「うるさいっ！とにかくこれは僕なりのけじめでもあるんだ！外野は黙っていてくれないかっ！」

それから数分後……

ギーシュとの決闘に、嫌々ながらも臨む事になったヴィストリア。
向かい合う二人。

そのヴィストリアの背中にふわりとした重み加わる。
さらに頬にサラサラとした感触。

「……………？」

不思議に思うヴィストリアが振り返り見たもの。

それはヴィストリアの背中に抱き着き、自らの頬をヴィストリアの
頬に擦り寄せる一人の少女だった。

「えっと……」

混乱するヴィストリア。

その彼の目の前に抱き着いたままの少女が、何故かハルケギニアの
人達にも読める文字で書かれたスケッチブックを突き付ける。

『みつけた……』

丸く可愛い字でそう書かれている。

「あ、あれ？」

その字とスケッチブックに心当たりのあるヴィストリアはとりあえ
ずこの抱き着く少女を確認しようと引きはがす。

「…っ」

少女の口から漏れる喘ぎ声にも似たため息はとりあえずスルーで。
引きはがした少女。

それはヴィストリアのよく知る少女だった。

肩ほどで切り揃えられた柔らそうな茶髪の髪型。

ルビーを思わせるヴィストリアと同じ深紅の瞳。

芸術品のように整った顔。

出るところは出て、引っ込むところはしっかりと絞られているスタイル。

そしてなにより印象的なのは左手に持たれたスケッチブック。

どこから見てもそれは…”自分の妹のアリス”であった。

だが、なぜ彼女がここにいるのかが判らない。

彼女は自分が召喚されたとき、居なかつたはずなのだから。

「あ、あれ？なんでここに？」

カキカキとなんの迷いもなくスケッチブックにマジックを走らせる。

『貴方の居場所が私の居場所』

「もしかして…アリスも召喚されて？」

ペラ…

『私は貴方以外の呼び掛けに答えない…』

「でも召喚じゃないなら一体どうやってこの世界に？」

ペラ…

『ヴィステイ…あまり私をナメないでほしい』

「…え？」

ペラ…カキカキ…

『貴方に会うためなら、世界の壁くらい越えてみせる…』

「あ…はは…凄いな…」

「おいお前っ！」

ほのぼのと会話をしているとヴィストリアの前方から声がかかる。見るとギーシュが肩を震わせ、怒っていた。

「あ、”忘れてた”…」

ポツリと呟いたヴィストリアの言葉。

それがギーシュをキレさせた。

「ふ…ふふふ…良い度胸じゃないか。僕を無視して美少女といちや

「いちゃいちゃいちゃいちゃいちゃとっ！」

「え？いや…確かに美少女は美少女だけど彼女はただの妹で…」

ちらりとアリスを見る。

『美少女…』

一言スケッチブックに書き、その周りにハートマークを量産するアリス。

よほど嬉しかったらしい。

「あ、アリス？」

『ヴィステイ。私、美少女？』

「え？あ、うん。アリスは美少女だと思うけど…」

ペラリ

『嬉しい…』

「言ったそばからお前達はああっ！！！！」

カキカキ…

『…？ヴィステイ、あの人はなぜ怒っているの？』

「たぶん、僕が彼との決闘を無視してアリスと話してるからじゃないかなあ…」

『……………？決闘？』

こてん。

可愛らしく首を傾げるアリス。

「うん…なんか流れでそうなっちゃったみたいで…」

対するヴィストリアはげんなりした表情で告げる。

『ヴィステイは、決闘…いや？』

「そりゃやらなくて済むならそれが一番だけど…」

カキカキ…

『……私が代わる？』

「え？でも…」

「君達いい加減にしたまえっ！」

ギーシュが怒りに任せて杖を振るう。

ぼこりと音がして青銅のゴーレムが地面から生えた。

『あれくらいなら平気。ヴィステイは休んでて。すぐに終わるから』

「え？いや…でも…」

「僕はどちらでもいいさ。ただ君達は僕を怒らせた！女だからといって手加減はできないからそのつもりでいたまえっ！」

『構わない。すぐに終わらせる…』

両者構える。

が、

『……ごめん。少し待ってほしい』

突然アリスからタイムが入る。

「どうした？まさか降参とでも言つつもりかね？」

『そんなつもりはない。ただ少し席を外したい』

「ふん？逃げるつもりか？」

『そんなつもりはない。すぐに戻る』

「すぐに？ふん。武器でも取りに行く気かね？」

『違う。さっきヴィステイに抱き着いたせい…』

「…？」

「え？僕？」

ギーシュと二人、首を傾げる。

『下着が濡れて気持ち悪い。あと冷たくて感じちゃっ…』

「なっ!?!」

「ちよっ!?!アリス!公衆の面前でなんて事書いてるの!?!」

『ヴィステイ責任とってほしい…』

「責任!?!」

『身体が火照ってしかたない。鎮めてほしい』

「だからなんて事書いてるのさっ!」

『…?だから鎮めてほしい。あなたの指と舌で私の胸とあそこを愛撫して…』

「ストーーーーーッップ!?!公衆の面前でホントなんてこと書いてるの!?!」

『なにも合体までなんて贅沢は言わない。けれどその分までヴィステイの指と舌で愛して……』

「お願いだからアリスちよっと自重してーーーーっ!?!」

第6話 111からR15です。……多分。(後書き)

これって……本当にR15で良いんだろうか？

監修さんごっしょいします？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3657i/>

優しき闇の使い魔

2011年9月28日12時31分発行